

茅野遺跡の後・晩期の石器について

大工原 豊

1. 石器組成の特徴

茅野遺跡からは後期後葉～晩期前葉を主体とした多種多様な石器が多量出土している。これらは打製系列（A類・B類）、使用痕系列（C1類・C2類）、複合技術系列（D類・E類・F類）に分類できる。そして、さらに打製系列は押圧剥離系列（A類：石鏃・石錐等）と直接打撃系列（B類：打製石斧等）に細分され、使用痕系列は形状選択系列（C1類：石皿・凹石・磨石等）と形状非選択系列（C2類：敲石・砥石等）に、複合技術系列は非機能系列（D類：石棒・石剣・岩版等）・機能系列（E類：磨製石斧・石錘）・装身系列（F類：石製装身具類）に細分することができる（大工原 2008等）。本遺跡での各系列及び各器種の在り方は、当期の群馬地域においては、ごく一般的なものとも言えよう。すなわち、石器組成をみる限り、本遺跡は一般的な集落遺跡であり、一般的な生業活動が行われていたと判断される。

2. 石鏃模造品について

晩期前葉の押圧剥離系列は非常に特徴的な在り方を示している。すなわち、石鏃と石鏃模造品が大量に出土している点である。こうした状況は西関東から甲信地域にかけて広範に認められる現象である。石鏃の激増の大きな要因は、石鏃模造品の大量製作である。これらは従来石鏃未成品とされていたものであるが、一般的な石鏃とは異なる工程で製作されており、別の器種として扱うべき石器である。すなわち、石鏃の製作では薄手の素材剥片から押圧剥離により調整加工を行って成品化しているのに対し、石鏃模造品では厚手の素材剥片から両極技法による直接打撃で調整加工を行っており、押圧剥離は行われないうか、行われたとしても極めて限定的である。後者では先端が尖っていないものが多く、茎部も丁寧な作出されていないものも多いので、実際に矢に装着して使用することは困難である。つまり、これらは実用的な石鏃の製作途中で放棄されたものではなく、これ自体が完成品なのである。

したがって、石鏃模造品の用途は、実用ではなく儀礼・祭祀に用いられた石器と考えた方が矛盾ないのである。儀礼・祭祀の中での模造弓矢を用いる儀礼は、神社の破魔矢をはじめ、葬送儀礼で用いる民俗事例も広く存在している。これらの儀礼行為と直接結びつけることはできないかもしれないが、石鏃模造品が出現した晩期前葉はこれまで行われていた細形石棒を用いた祭祀が衰退する時期である。それに代わる新たな祭祀行為として石鏃模造品をもちいた「模造弓矢祭祀」が盛行したと考えられる。

3. 石器・石器石材の搬入経路について

茅野遺跡で出土した石器及び石器石材の入手先と搬入経路について検討してみたい（図4-6）。本遺跡から約5.5km東方に利根川があり、ここに転石として存在する黒色頁岩・黒色安山岩・安山岩などが本遺跡の石器石材の大部分を占めている。黒色頁岩は押圧剥離系列の石鏃・石錐などと、直接打撃系列の打製石斧の主要な石材として用いられている。前者は一連の製作工程を示す石核・剥片・石器が揃っているの、転石として入手して遺跡へ搬入されたものである。これに対し、後者は一連の製作工程を示す資料が遺跡内には存在していないので、転石を河原かその近くで剥片剥離作業が行われ、素材剥片・半成品・完成品として遺跡へ搬入されたものと推定される。また、石皿・凹石・磨石・敲石など使用痕系列の石器は、素材となる手頃な転石を遺跡へ搬入していたと考えられる。

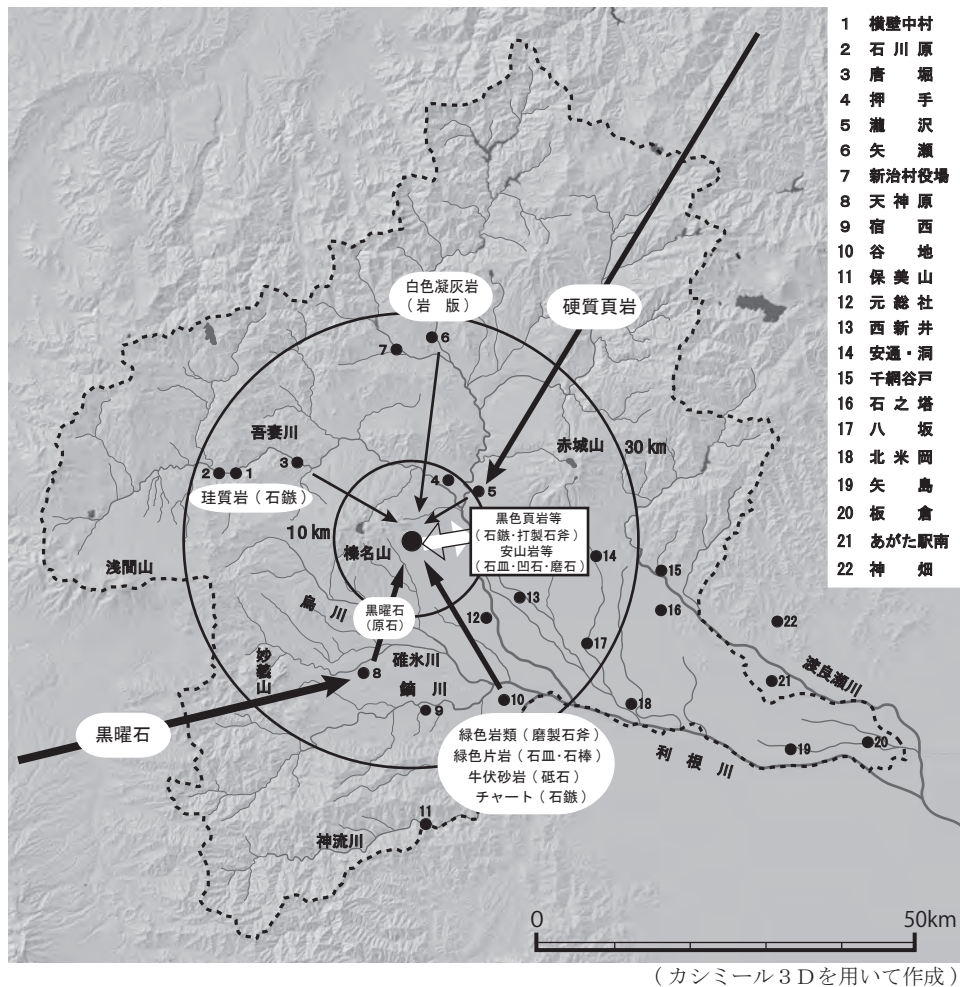


図4-6 群馬県的主要遺跡と茅野遺跡に搬入された石器石材（晩期）

黒曜石の搬入経路については、「茅野型石鏃の研究」（大工原 2016：本書所収）で詳述しているので、繰り返し述べないが、「黒曜石流通の大動脈」上に位置する天神原遺跡（茅野遺跡23.3km：以下同）から間接的に搬入されたものであろう。ここでの流通形態は原石（小形原石：30～100g・超小形原石：30g以下）であったと推定される。

また、東北産の硬質頁岩は、利根川東岸に位置する瀧沢遺跡（8.7km）が流通拠点であり、ここから搬入されたものであろう。茅野遺跡に剥片類がほとんど存在していないことから、完成品の石鏃として搬入されたものと推定される。

珪質岩・珪質流紋岩は吾妻川流域で転石として入手可能な石材であり、吾妻川流域の同時期の遺跡では石鏃・石錐など押圧剥離系列の石器として多用されている。本遺跡から吾妻川までは最短6.2kmなので、直接入手することも可能であるが、剥片類がほとんど存在しないので、完成品として唐堀遺跡（20.6km）などから完成品として搬入された可能性が高い。

白色凝灰岩製の岩版は利根川上流域で産出することが判明しており、流れ下るにつれてサイズが小さくなることが明らかにされている（角田 2010）。本遺跡では55点出土しており、最大20.5cmの資料が存在していることから、矢瀬遺跡（27km）など利根川上流域の遺跡から搬入されたものと推定される。また、黒色頁岩製の安通型石鏃が2点出土しているが、石材と形態からみると矢瀬遺跡出土例に類似しているので、岩版と同様矢瀬遺跡から搬入された可能性が高い。

磨製石斧は緑色岩類製（超塩基性岩を含む）のものが多く、また、石棒・石剣は緑色片岩製のものが

多い。そして、砥石（石庖丁様石器を含む）は牛伏砂岩製のものが大部分である。これらは鎗川・神流川流域で転石として存在している石器石材である。こうしたことから谷地遺跡（22.9km）など群馬南部地域の遺跡から完成品として搬入されたものと判断される。また、結晶片岩の転石（棒状礫）も多く出土しているし、結晶片岩を混入する土製耳飾も多数出土している。したがって、石器及び石材の流通からみる限り、群馬南部地域とは非常に密接な関係が構築されていたことが分かる。

なお、チャート製の石鏃は剥片類がほとんど存在しないことと、形態的に茅野遺跡の主体的な形態と異なるので、完成品として搬入されたものと判断される。搬入先の候補としては、鎗川・神流川流域の谷地遺跡と、渡良瀬川流域の千網谷戸遺跡（29.7km）が上げられる。上述のように茅野遺跡からは群馬県南部で産出する石材が多く搬入されているので、前者の可能性が高い。

以上のように、茅野遺跡に搬入された石器及び石材はすべて半径30km圏内に存在する遺跡からもたらされた可能性が高いことが判明した。また、地形を観ると茅野遺跡と谷地遺跡の間には、大きな自然障壁が存在しておらず、重い石材でも円滑に運搬することが可能であることが分かる。それに対し、ほかの遺跡との間には、山や深い谷などの自然障壁が多く存在しており、実際には移動距離はさらに長く、運搬コストも大きい。

このように後・晩期には、それぞれの集落が特産物・資源をもち、それが流通するネットワークが形成されていた。少量搬入された完形の石器は、集落相互の関係性のなかで交換されたものと推定される。しかし、遠隔地から搬入された黒曜石や硬質頁岩や群馬県南部地域の石器などは交易によってもたらされたものと考えられる。そして、すべての集落が等質的に特産物・資源を有していたわけではない。谷地遺跡のように石材資源に恵まれたムラがある一方、特別な資源を持たないムラも多数存在していたと考えられる。そのため、茅野遺跡や千網谷戸遺跡では土製耳飾を製作することにより、特産物を創造していたと考えられる。現代流に言えば、「地域興し」としてとらえることができるのである。